

朝番

たけだ

朝番

おはよう、と言う声がきこえたから、僕は目を覚ました。ただ、テンションは、上がらない。むしろ、機嫌は、悪い方だ。部屋には、朝ごはんの匂いが充満していた。狭い部屋なのだから、仕方ない。独り暮らし用部屋に、一方が女といえども、大人二人はきついメグルが二人暮らしに賛成するとは、思わなかった。反対されそうな要素は山の様にあったし、なにより彼女は、何々用と書かれている物を、それ以外の用途で利用することに強い不快感を覚えるからだ。玉子焼き用醤油は、生玉子かけご飯には使わないし、眼鏡拭きで、ゲームや携帯電話の画面を拭いたりしない、いや、できないのだ。確かに大切なことで、一部それらの心持ちが、過ちを防いでいるだろう。でも、それらの言葉への神経質が彼女自身を苛立たせることになる。喧嘩の原因にもなる。

そんな理由で、一人暮らし用のアパートに二人暮らしだなんて、許可が下りたことに僕は驚いた。

ベッドを出ると、朝ごはんが目に入ってきた。ゆで卵、手づくりパン、味噌汁、サラダ、野菜ジュース。顔を洗いに、台所に向かう。冬は、水が痛い。顔のパーツが取れそうな気がして、あまり洗いたくない。自分に鞭を打ち、無理矢理洗う。鏡に写る自分の顔が、昨日とは少しだけ違う様に見えた。錯覚だ。それが人間、疲れている顔もあれば、楽しい顔にもなるし、変化して当たり前なのだ。鏡越しに写るメグルと目があった。毛布をかぶって移動しているところだった。

朝ごはんを半分残し、トイレに向かう。悪いとは思うけど、朝からあんなに食べることができない。どちらかといえば、朝は出したい方だ。トイレに入り、棚から本を選ぶ。実家のトイレにも、父親お手製の本棚があった。トイレには、本棚が付き物だと、独り暮らしを始めてすぐに取り付けた。本を手に取りページをめくる。しばらくすると、外からメグルの呼ぶ声がした。扉を少しあけて、何か確認する。どうやら、集中して時間を忘れていたらしい。始発を逃すとほぼ遅刻なのだ。

急いで、着替えを済まし、言葉通り、飛び出す。なんと家の前でメグルが車を用意して待っていたのだ。てっきり、ベランダで洗濯物でもしているのだと思っていた。素直に言えば、嬉しかった。ただ、彼女の運転はあまり上手くない。酔うからいや、とかではなしに、送ってもらった後が心配だった。一人で運転して戻って来られるかが、心配だったしかも、人様の車だ。

しかし、乗ることにした。遅刻は出来ないからだ。朝番は、一人しかいない。今から代役を頼んでも間に合わないし、まず誰も電話に出ないだろう。

メグルは、ミラーを整えながら、自分の髪のチェックもする。こなれた作業だと思った途端、クルマは発進した。後ろに。

幸い怪我人はでなかったが、借り物の車は後ろ半分使えない。ガラスは割れタイヤもパンクしていた。ぶつかったところも悪かった。古い倉庫で、アパートの大家さんのだ。

彼女は、目を見開いたまま動かない。ショックでかたまっているのかとおもったが、違う。笑いを堪えていたのだった。

なんで一なんで一あはは、と笑い声が車の中で響く。そりゃ、バックに入れてアクセル踏んだら後ろに下がるのは当たり前だよ、と僕は言う。そんなことわかっているよ、と頭を叩かれた。そして、また笑う。僕には何がおかしいかわからない。車の時計は、始発にはのれません、と言っている。とりあえず、車を一度前に出してと、僕が言う。シフトをDに入れて、アクセルだよ、とも言う。わかってるってば、と彼女は楽しそうに、今度はまっすぐ正面に進んだ。後方で大きな物音がした。

大家さんの倉庫が、崩れた。車が挟まって、折れた柱の代りをしていたのに、その支えである車がなくなったからだ。一昔前のコント番組ばりの崩れ方に、現実感が全くわからない。

彼女は車から降り、割れた後方のガラスを確認しに行く。僕は、携帯電話を取り出し、会社に電話してみる。誰もいるわけない。次に、同僚のK君に電話してみる。出ない。

彼女が戻って来くる。もう、何やってんの事故だよ、仕事どころじゃないでしょ、と僕に言う。確かにそうだ。そうなのか。どうなんだ。怪我人はいないけど、やっぱり警察呼んだり、保険確認したり、もちろん、大家さんに謝ったり、車を借りたメグルの先輩にも謝ったりしないといけない。でも、会社も会社で心配だ。今日は僕が鍵を開ける番で、鍵は僕の手元にある。スペアは社長が持っているのだけ。でも社長は普通昼までこないから。とりあえず、社長に電話だ。って、社長の電話番号知らないことに気が付く。

こんなことで絶望な、僕を許して欲しい。

彼女は、僕がいろいろ計算して、さらに行き詰まったことを悟って声をかけた。もしもしー？で、どうしようかね、大家さんとこいくべきだよ、わざと、オチャラケた風に彼女は言った。

正気に戻った僕は、大家さんそこに向かった。アパートから歩いて99歩、って大家さんが初めて会った時に言っていたけど、本当に99歩だった。ベルを鳴らす。返事がない。もう一度鳴らす。

大家さんは、留守だった。これは別にラッキーなんじゃなくて、逆に話がややこしくなるパターンだ。大家さんが帰ってくるまで、ずっとここにいないと、大家さんが帰って来て、何があったんだ、と大騒動になりかねない。

メグルと車の待つところに戻る。次にすることは、車を返しに行くことか。直してから返すべきなのか、考える。メグルと相談しても結論はせず、警察を呼ぶことにした。

警察がくるまでに、時間がかかるらしい。今日は何でも同じ町内で事故が四つも同時に起きていて、死人とかけが人とか出てるらしい。ここが一番ランクが下なんだそうだ。

車のボンネットに腰をかけながら、携帯電話を僕はじっとみつめていた。彼女は横で、空を眺めて、雲をなぞったりしている。風の音が心地よい。静かだった。

穏やかな空間に、自然と溶け込むように、彼女が話始めた。

「あたし、思うんだよ。君、ずっと働きっぱなし。わかるよ、このご時世大変なのは。でも、無理しすぎでしょ。結婚もしていないあたしを養うだなんて言ってくれたのはうれしいけど。やっぱり一緒に働こうよ。いまの仕事あってないよ、君にさ。変わっちゃったもんな。ずっと携帯電話ばかり見てるしね。わかるよ。本当に大変だなんて、あと、ありがとうとも思うけど。やっぱり、無理しちゃいけないよね。どう思う」

僕は何にも言うことが出来なかった。それは、彼女が正しいとかそうじゃないとかではなく、僕にその問いがなかったからだ。

世間で言う良い大人の年齢になって、無目的にフリーターするのもそろそろやめようと思って、彼女ともけじめをつけようと思って、就職に繋がりそうな仕事先を見つけて、一定の期間彼女と一緒に生活して、彼女を養っていければ、結婚しようとかそういったことは考えていたけど、ずっと先のことと、今の仕事ばかり考えていて、その間の話をすっかり抜かしていた。僕も質問する。

「もしかして、この事故は、わざとなのかな」